

ノートルダム学院小学校 校長  
行田 隆一先生  
ゆきた りゅういち

中学校の英語教師、海外ボランティアを経て1989年より同小学校に赴任。英語科専任教師を経て、2012年より校長。校長になった今も週に一日、6年生4クラスの授業を担当している。「やっぱり教えるのが好きなんです。児童よりも楽しんでいるかもしれません(笑)。6年生は難しい年齢でもあります。スピードとテンポで勝負しています」。



## 時間数の壁

内外から、「卒業時にどれくらいの英語力がつきますか?」との質問をよく受けます。ただ長年、小学校英語教育に携わってきてわかったのは、定着の難しさ。言葉はナマモノ、使ってこそ生きてくので、授業にはせめて週三日はいいところですが、そこは文科省に期待するとして、限られた時間で何が出来るかが私たちに与えられたミッションだと考えています。

いま、英語の授業数は1、2年生で週2時間、3年生以上は週1時間とさほど多くはありません。進学校という特殊な事情もあって、高学年では時間数が確保し難いのが実情です。1~5年生はネイティブ教員と日本人教師のチームティーチングで行い、6年生は私がひとりで教えています。

ノートルダム・イングリッシュのモットー  
楽しい、わかる、身につく授業

ノートルダムでは、1年生から専科制をとっていて、ノートルダム英語検定試験(以下、NDET)という口頭で行う独自の検定試験を課しています。習熟度を測るためにも、ゴールは大事ですね。小さな目標でも、達成すると自信になります。NDETを始めたのは2003年です。検定試験の教本を独自で開発し、当初は単語と慣用句の検定を行いました。その後、正しい発音を身につける学習法として開発したのが、音でつなげる「音のしりとりにメソッド」です。2007年から検定にも盛り込みました\*。

### タッチパネル型スクリーン(IWB)

パワーポイントで作成した図をテンポよく提示できるIWB。授業に大変重宝をもらっています。タイムリーで動きやすいレイアウトを簡単に用意できる。

### ノートルダム英語検定試験(NDET)

ノートルダム学院小学校で独自に開発された、受験者が面接官に英語で答えるオーラル(口頭)テスト。単語検定、慣用句・対話検定、しりとりにメソッドの3種類がある。しりとりは行田先生が開発された「音のしりとりにメソッド」を採用している。

### 音のしりとりにメソッド

NDETを実施したことで、子どもたちの単語末尾の発音に問題があることに気がついた行田先生。ほとんどの言葉が「母音」で終わる日本語を使い慣れていることが、「子音」で終わる英語の正しい発音を邪魔していると考え、「母音排除」を目的に、音のしりとりにメソッドを開発した。多くの子どもたちに学習効果があったことから、NDETにも盛り込まれた。音のしりとりにメソッドを通して、一定数の単語も覚えらる。

## 先進的な取り組みをレポートします ノートルダム学院小学校

1954年、アメリカ・セントルイスからやってきた4人のシスターによって開校されたノートルダム学院小学校は京都市左京区の閑静な住宅街に位置しています。開校以来、英語教育にも積極的に、「音のしりとりにメソッド」など、ユニークで先進的な学習・指導方法の開発などで教育関係者の注目を常に集めてきました。創立60周年記念事業の目玉でもあった新校舎で授業を見学させていただくとともに、長年、英語専科を担当されてきた行田校長先生にノートルダム・イングリッシュについて伺いました。

## 資料7 どうなる? 小学校英語

小学校英語教育で大切なのは、  
楽しいこと、わかること、身につくこと  
英語が苦手な日本人にしないために



IWBの画面とあわせて、アニマルフォニックスで発音練習

スキットでの英会話練習。「わからない」と自信をなくさせないように、日本語もうまく混ぜながら、声色を変えたりしながら、テンポよく授業を進める行田先生。授業の後半は、暗記してきたA~Lまでのアルファベットから始まる定型文を早く答えるゲームのトーナメントが開催されていました。

NDETの目標は、一定数の英単語や慣用句を正しい発音で身につけること。3年生修了までに全員が2つの検定のファーストステップに合格しなければなりません。その他、任意でJET(ジュニアイングリッシュテスト)も勧めています。

本校の英語教育には、60年以上の歴史がありますが、中学校英語のように文法中心の授業を行っていた時期もありました。でも自信をなくしたり、楽しくなくなったりしたら元も子もありません。そこで、試行錯誤の上で辿りついたのが今の形です。2002年に導入したタッチパネル式大型スクリーン(IWB)の存在も大きいですね。ベテラン教員といえども、児童全員を注目させるのは簡単ではありませんが、IWBを使えば「次は何か映し出されるのか」と全員を画面に引きつけることができます。子どもたちの集中力を途切れさせずに授業をテンポよく進める上では、画期的でした。定着を助ける繰り返し学習にも最適です。

\*行田先生は、NDETや音のしりとりにメソッドで作成したオリジナルの学習ゲームを使った学習法で2010年に第59回読売教育賞の最優秀賞を受賞しています。

## 家庭でできること

家庭ではぜひ、学校で習っていることを聞いて、誉めてほしい。NDETやその他の検定試験の応援をするのもいいですね。結果が出ると誉める機会も増えますから。

また保護者が英語や国際社会に関心を持っていることを背中で見せるなど、色んな形で子どもたちに伝えてほしいですね。家庭でも世界中のニュースが手に入る世の中ですから、一つの話題からでも世界を意識させることで、子どもたちの視野を広げてあげてほしいといつもお話ししています。

## 子どもたちに期待すること

私は4月には必ず子どもたちに「発音と英語のリズムは絶対に上手に上るから、信じてついてきてほしい」と言っています。定型文はスキット(寸劇)を繰り返すなどして一定量覚えませんが、週1回ではなかなか他人とコミュニケーションがとれるところまで手が回らない。でも、発音はみんな100点がとれる。コンプレックスを持たなければ、英語は誰でも話せるようになります。

受験英語の要素が入る中学では、ペーパーテストなどでは他の子と差がつかないこともあります。でも、英語を好きなまま進んでいってくれたら、それほどいいことはありません。

子どもたちには、英語に苦手意識を持たない新しいタイプの日本人として、世界ではばたいてほしいと思っています。わが国の現行の英語教育システムにはまだまだ改善の余地があります。私は産学連携、つまりECCなどの民間企業との連携にも大きな期待を寄せています。

# 先進的な取り組みをレポートします

## 千早赤阪村立 千早小吹台小学校

大阪府唯一の村で、府の南東部に位置する千早赤阪村。  
小さな村で育つ子どもたちに、  
広い世界にはいろんな人や文化があることを知ってほしいと、  
村では10年以上前から先駆的に英語活動を取り入れています。  
ももとの英語好きを活かして、  
当初から積極的に英語活動に取り組まれている大門先生に、  
授業のこだわりや子どもたちの様子についてお聞きしました。



千早小吹台小学校 教諭  
大門 賀子先生  
だいもん・のりこ

子どもの頃、父親の仕事の関係で2年に1度、アメリカ人やドイツ人が家に訪れていたという大門先生。外国の人は、日本人より子どもの話をきちんと聞いてくれるという印象を持ったそうだ。英語は、小学6年生の頃からNHKラジオで毎日ネイティブの英語を聞いて学んだ。2女1男の母で、のびのび育てた子ども達も英語好きだ。

どうなる？

## 小学校英語

中学生になった卒業生がライティングにつまずいて「スペルがわからん。しゃべれるんやけどなあ」とぼやいていました。私たちが子どもの頃なら、この時点で「私は英語ができない」と諦めてしまっていたかもしれませんが、彼は小学校時代の英会話経験で話せるから英語自体は好き、ライティングもがんばると言っていました。小学校の英語は、中学以降の英語学習の土台作り、栄養をつけるものなのだ改めて実感しました。

——村全体で英語活動に力を入れられているそうですが……。

私が村に赴任した14年前から、各担任の裁量に任せる形で、外国人の先生を呼んで英語活動ができる環境がすでに整えられていました。前任の赤阪小学校を中心に10年ほど前から本格化して、2005年からは村のすべての学校で英語活動に取り組んでいます。

英語活動はALT（外国語指導助手）のノア先生と一緒にを行っています。ノア先生は10年以上前から村の英語活動を支援してくれていて、村の幼稚園、小学校、中学校すべてを受け持っています。

——授業ではどのようなことを大切にされているのでしょうか。

子どもたち同士の反応、交流を重視しています。「Me, too.」「Great!」など、簡単なコメントワードをまとめたプリントを渡して、互いについていづちや誉め言葉をかけ合うように促しています。自分の思いを伝えることも大切だし、相手の言葉に応えることも大事。習慣にすることで、英語に限らずコミュニケーションを取るときに大切な、「相手が言おうとしていることを汲み取ろう」という態度が身につけると、生

徒を見ていて思います。

留学生や付近に住む外国の方と関わる機会も積極的に作って、「英語」といってもいろんな「英語」があることを感じてもらっています。授業では外国のことを話すことも多く、子どもたちは日本と他の国との違いや、文化の違いを知らず知らずに感じ取ってくれています。これは、ひいては隣にいる他者を理解して尊重することにつながるし、自分はそのままの自分でよいという自己肯定感にもつながると思うんです。高学年になると、友だちと英語でインタビュー活動を行います。好きな食べ物は何？ 行きたい国は？ とか、日本語では聞かないようなことを英語なら自然と聞くことができ、お互いのことを知る楽しさがあるのも、英語活動の魅力です。

——授業では、先生やノア先生が何も言わなくても、子どもたちが自然と英語を発していましたね。家庭での様子など、保護者の反応はいかがでしょう。

聞いた言葉をすぐに言えるというのは、きちんと聞き取れているということ。歌も、聞いて2回も歌えばすぐに覚えます。授業では、子どもたちを、励まして褒めて、楽しみながら英語

を聞く、話すということを繰り返しています。歌、挨拶、授業の中身、振り返り、歌というパターンを決めているので、子どもたちも不安になりません。

家でも英語の歌を口ずさんでいたり、兄弟同士や両親とちょっとした受け答えを英語でしている子は多いようです。保護者の方は子どもたちが楽しんでいるのを感じてくださっていて、村の英語活動はずっと続けてほしいと言われます。

——最後にひと言、お願いします。

私は担任としても、英語活動担当としても英語活動を行ってきましたが、やはり学校で子どもたちの一番身近な存在である担任が、英語を積極的に学ぼう、話そうという姿勢が、子どもの「自分も楽しんで英語を学ぼう」という気持ちを生むのだと感じています。家庭でも同じではないでしょうか。お母さんお父さんがテレビでも英語の絵本でも、子どもと一緒に共感したり楽しんだりすることで、子ども自身にも英語にも興味を持っているよというメッセージを送ることが子どものやる気につながるように思います。



# どうなる？ 小学校英語

コンピュータを使った英語活動をされているそうですね。

総務省の先導的教育システム実証事業協力校やパナソニック教育財団の特別研究指定校などになり、ICT教育の推進に力を入れてきました。企業の協力で、総合的な学習の時間にプログラミング教育を取り入れたり、iPadやWindows® タブレット、Google™ Chromebook™などのタブレット端末やパソコンを、1人1台日常的に使用したりしています。

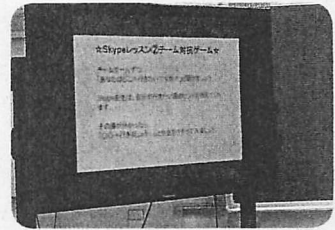
その流れで、英語活動でもiPadを活用。月に約1回、オンライン英語スクールを運営している民間企業の協力で、Skype™を使ってネイティブの先生と会話するプログラムを実施しています。まず、昨年の3学期に、6年生が5回の授業を体験。今年度は、5・6年生が年間を通して全11回の授業を受けています。

Skype™は、テレビ電話のように、接続先の人とお互いの顔を映し合いながら話せる、インターネットのシステムですね。

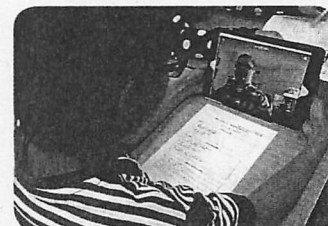
はい。子どもたちは、教室にしながらiPadを通して現地のネイティブ講師と会話ができます。授業では、3〜4人のグループにiPadが1台あってがわれ、現地ではそれぞれに異なった講師が待機。一人ひとり順番に英語で話をしていきます。

多摩市では、ネイティブのALT（外国語指導手）が月に1度来てくれますが、クラス全

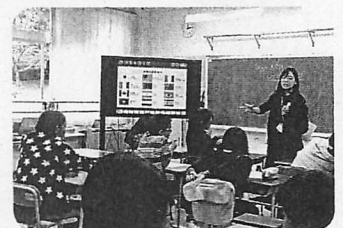
ゲーム感覚で進行。終わったあとは、「楽しかった」との声が。



グループに1台のiPad。この日は6人の先生が待機していました。



画面のむこうは外国！あらかじめ会話の流れを学び、プリントもあるから会話はスムーズに進みます。



全体授業では電子黒板を使用する場面も。

## 先進的な取り組みをレポートします 多摩市立愛和小学校

東京都の多摩ニュータウンの一角に位置する愛和小学校は、全員に1人1台のタブレット端末貸与などICTを活用した教育を進めています。英語活動にも、iPadを使った、ネイティブの先生とのオンライン授業などを取り入れ、楽しく英語を話す体験を増やしています。校長の松田孝先生に、お話をお聞きました。

愛和小学校 校長  
松田 孝先生



小学校での教員、校長などを務め、2010年には狛江市の教育委員会の指導室長に就任。ICT技術の活用がこれからの教育の鍵になると考え、市の全小学校へのタブレット端末導入などを実施。2013年より愛和小学校（元・東愛宕小学校）の校長。

体に対して1名なので、子どもが先生と一対一で英語を話すチャンスは限られています。そこで、Skype™授業で外国の講師と英語で話す機会を増やし、国際的な体験を多くしてもらおうと考えました。

授業はどのように進むのですか。

導入では、日本人の先生が、クラスの全員を相手に授業。その日に使う基本フレーズや必要になると思われる単語について、事前に意味や発音を確認します。

その後の「展開」では、英語ネイティブの先生と実際に会話をします。子どもたちは、「導入」で学んだ内容の書かれたプリントを手元において、会話していきます。具体的には、例えば10月の6年生のクラスでは、「色々な国の名所」について、ネイティブの先生に「行きたい国」や、

「その国の名所」をたずね、聞き取った返事をメモするといった具合です。どうしても聞き取れないときは先生がチャットで書いてくれることもあり、基本的にはすべて英語でのやりとり。聞き取れたらポイントがつくなど、ゲーム感覚で会話を進める工夫もされています。

Skype™を終了した後は「まとめ」です。ここでは、日本人の先生と、ゲームの結果を確認しながら復習をします。

このようにiPadを使った会話と講義型の授業とを、交互にメリハリをつけて行うのも本校の取り組みの大きな特長です。

子どもたちの反応はいかがでしょうか。

iPadの操作にはもう慣れていてアシスタントはいりません。英語で話すのは「恥ずかしい」と言う子どももいますが、そう言いながらも、英語での挨拶や、聞き取れなかったときの「Please speak more slowly.」などは自然と口にします。やはり、回を重ねて継続することが大事ですね。

今後は、アメリカETSの開発したTOEFLの小・中学生版、TOEFL Primary®というテストの導入も検討しています。スピーキングのテストもiPadを使って音声でアメリカに送って採点。「英語を使って何ができるか」を見るテストで、授業の成果や一人ひとりの可能性を知るのが目的です。子どもたちには、20年30年後に国際社会で、英語を駆使し、ICT機器を自在に操って活躍してほしいと思っています。